

第482回定期演奏会
9月11日(金)・12日(土)



プログラム Program

第482回定期演奏会〈「生誕250年記念 トリビュート・トゥ・ベートーヴェン」シリーズ／克服〉

The 482nd Subscription Concert "Tribute to BEETHOVEN Series"

2020年9月11日(金)18:45／12日(土)16:00 愛知県芸術劇場 コンサートホール

6:45pm, Friday September 11 / 4:00pm, Saturday September 12, 2020 at Aichi Prefectural Art Theater Concert Hall

指揮：小泉和裕〈名フィル音楽監督〉

Kazuhiro KOIZUMI, Conductor / Music Director

コンサートマスター：荒井英治〈名フィル首席客演コンサートマスター〉

Eiji ARAI, Principal Guest Concertmaster

ベートーヴェン：交響曲第2番ニ長調 作品36

(約33分)

Ludwig van Beethoven (1770-1827): Symphony No.2 in D major, Op.36

第1楽章 アダージョ・モルト - アレグロ・コン・ブリオ

Adagio molto - Allegro con brio

第2楽章 ラルゲット

Larghetto

第3楽章 スケルツォ：アレグロ

Scherzo: Allegro

第4楽章 アレグロ・モルト

Allegro molto

休憩 Intermission

(20分)

ブラームス：交響曲第2番ニ長調 作品73

(約44分)

Johannes Brahms (1833-1897): Symphony No.2 in D major, Op.73

第1楽章 アレグロ・ノン・トロツポ

Allegro non troppo

第2楽章 アダージョ・ノン・トロツポ

Adagio non troppo

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ(クワジ・アンダンティーノ)

Allegretto grazioso (Quasi Andantino)

第4楽章 アレグロ・コン・スピリト

Allegro con spirito

主 催：公益財団法人名古屋フィルハーモニー交響楽団

後 援：愛知県・愛知県教育委員会・名古屋市・名古屋市教育委員会・公益財団法人名古屋市文化振興事業団・朝日新聞社・メ〜テレ

助 成： 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション



小泉和裕 (指揮／名フィル音楽監督)

Kazuhiro KOIZUMI, Conductor / Music Director

2016年4月、名フィル音楽監督に就任。

1969年東京芸術大学指揮科に入学、山田一雄氏に師事。1970年第2回民音指揮者コンクール第1位受賞。

1972年7月、新日本フィル創立に際し、指揮者として参加。同年ベルリンのホッホシュレに入学し、ラーベンシュタイン教授にオペラ指揮法を師事。

1973年、第3回カラヤン国際指揮者コンクールに第1位入賞。その後ベルリン・フィルを指揮してベルリン・デビューを飾った。

1975年～1979年、新日本フィル音楽監督を務める傍ら、1975年ベルリン・フィル定期演奏会に登場、1976年フランス国立放送管を指揮しルービンシュタイン、ロストロポーヴィチとも協演、同年ザルツブルク音楽祭でウィーン・フィルを指揮、その後もミュンヘン・フィル、バイエルン放送響等、ヨーロッパ各地において精力的な指揮活動を行った。また、アメリカにおいても、1978年ラヴィニア音楽祭でシカゴ響を指揮し大成功を取めた後、1980年シカゴ響定期公演に登場し注目を集めた。その他、ボストン響、デトロイト響、シンシナティ響、トロント響、モントリオール響などにも客演。

1983年～1989年カナダのウィニペグ響の音楽監督、1986年～1989年都響の指揮者を歴任。ロンドンのロイヤル・フィルには1988年より定期的に招かれ、数々の名演を残すとともにチャイコフスキーの交響曲第4、5、6番のディスクを完成させた。

1989年～1996年九響首席指揮者、1992年～1995年大阪センチュリー響首席客演指揮者、1995年～1998年都響首席指揮者、1998年～2008年都響首席客演指揮者、2003年～2008年大阪センチュリー響首席指揮者、2008年～2013年都響レジデント・コンダクターおよび日本センチュリー響音楽監督、2006年～2018年仙台フィル首席客演指揮者を歴任。

現在名フィル音楽監督のほかに、都響終身名誉指揮者、九響音楽監督、神奈川フィル特別客演指揮者を務める。

ベートーヴェン

交響曲第2番ニ長調 作品36

1792年にボンからウィーンに出たベートーヴェン(1770～1827)は、まずピアニストとして有名になり、大貴族にも受け入れられた。作曲家としての名声も次第に高まり、1800年4月2日に宮廷劇場(ブルグ劇場)で初めての自主演奏会を開くまでになる。この演奏会では交響曲第1番、ピアノ協奏曲第1番、七重奏曲作品20が初演された。若い作曲家の持てる力を出し切るプログラムで、得意満面のベートーヴェンの顔が見えるようだ。

好事魔多しというが、一方で、ベートーヴェンは耳の病に苦しんでいた。ひどい耳鳴りと難聴が徐々に進んでゆく。様々な医者にかかっても改善しない。1801年6月には親友のアメンダとヴェーゲラーに手紙で耳の病気を告白する。そして1802年10月には絶望して「ハイリゲンシュタットの遺書」を書く。

それにもかかわらず、1802年は創作力の旺盛な年であった。3つのヴァイオリン・ソナタ作品30、3つのピアノ・ソナタ作品31、ピアノ変奏曲作品34と35、そして交響曲第2番。これらは全て「ケスラー」スケッチ帳の中で推敲を重ねられている。交響曲第2番の実質的な作曲は1802年に集中して、完成された。

交響曲第2番は、1803年4月5日にアン・デア・ウィーン劇場で、ピアノ協奏曲第3番、オラトリオ《オリーブ山上のキリスト》とともに初演された。初演の批評では、交響曲2曲は好評であったのに対し、ピアノ協奏曲とオラトリオは高い評価を得られなかった。

交響曲第2番は、第1番よりもどの楽章も規模が拡大し、魅力的な部分も多くなっている。初期の創作の総集約であると同時に、次の交響曲第3番《英雄》の飛躍に向けての確かな踏み台となっているのである。

第1楽章

序奏付ソナタ形式。序奏は交響曲第1番より大規模で充実した内容となっている。流麗な走句からクレシェンドして、ニ短調の分散和音を強奏するところは、はるかに第九交響曲を予見している。アレグロ主部に入って、第1主題はチェロとヴィオラが爽やかに疾走する。第2主題はクラリネットとファゴットで軽やかに提示される。コーダは若々しい力に満ち溢れている。

第2楽章

ソナタ形式。たおやかで美しい主題がたつぷりと歌われる。木管楽器の組み合わせやホルンの独奏的動きで、様々な音色変化も楽しめる。ロマンティックで平和な気分が支配している。

第3楽章

スケルツォ、三部形式。ベートーヴェンの交響曲で初めて導入されたスケルツォである。極端なデュナーミクとエコー効果で躍動する。トリオは民謡風の簡素な旋律とロ短調の属和音を強調した単純な動きで対照効果を生み出す。

第4楽章

ソナタ形式。第1主題の不意打ちのような冒頭動機は、破壊的なエネルギーを爆発させる。このうちのトリルの音型はすでに第1楽章序奏に現れていた。第2主題は木管の対話による暢気な歌。コーダは第2展開部を含むかなり長大なものである。ここでは冒頭動機と共に、トリオ中間部で聴こえたトリルの動きが目立っている。凄まじい高揚を築いて、見事に傑作を締めくくる。

作曲=1802年

初演=1803年4月5日 ウィーン、アン・デア・ウィーン劇場(作曲家自身の指揮)

楽器編成=フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部(第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)

ブラームス

交響曲第2番ニ長調 作品73

ヨハネス・ブラームス(1833～97)は、ドイツ北部のハンブルク生まれ。1862年以降はウィーンを拠点として活動した。彼の4曲の交響曲は、いずれもウィーン時代の1876～85年に初演されている。

第1番の交響曲は、その構想から完成に至るまで、長い中断期間を経て20年ほどの歳月を要した。1877年に第1番を完成させたブラームスは、第1番のピアノ4手版の編曲を進めつつ同年6月から第2番の創作に着手し、わずか4か月ほどで書き上げた。

《交響曲第2番》について、ブラームスは彼と親しい出版者ジムロックに宛て、冗談を交えた手紙を送っている。「私はこれまで、これほど悲観的で柔和な作品を書いたことがない。スコアは、死亡通知の黒枠をつけて出版しなければならない。」

ブラームスはこの年の夏を、オーストリア南部の湖畔の保養地ペルチャハで過ごした。《交響曲第2番》も、その地で創作の筆がすすめられ、10月に完成をみた。その2か月ほど後に行なわれた初演では、ハンス・リヒターが指揮台に立ち、大成功を収める。第1番の厳粛な楽想とは異なり、第2番はペルチャハの美しい自然を映し出す流れるような旋律と解放的な明るさに満ちあふれている。また、この交響曲について音楽評論家のハンスリックは、「とにかく良い音楽を聴きたいと願う、すべての人たちのために書かれたと言ってよい曲」と述べた。この交響曲においても、ブラームスは念入りの動機の組み立てを行ない、第1楽章の冒頭の動機でフィナーレを始めるなど、作品全体を緻密に織り上げている。

第1楽章:アレグロ・ノン・トロツポ

ニ長調。音楽は、まず低弦楽器が2度音程の動機「レー#ドーレ」を奏でる(譜例参照)。この2度音程の動機は、交響曲全体の基礎動機であり、曲中にさまざまな形で用いられている。その動機ののち、ホルンによる第1主題が穏やかに浮かび上がり、フルートなどの木管楽器が呼応する。ソナタ形式に基づき、ほのかな哀愁を帯びた嬰へ短調の第2主題は、ヴィオラとチェロによってなだらかに描かれている。終結部における、ティンパニに導かれて現われるホルンによる長い独奏の旋律も感動的だ。

☆譜例(第1楽章冒頭)



第2楽章: アダージョ・ノン・トロツポ

ロ長調。チェロが、第1主題を問いかけるように語り始める。第1楽章の開放的な楽想とは対照的で、内に秘めた情緒を思わせる。その下行する主題とともに、ファゴットは上行する対旋律を奏でてゆく。この第1主題部は対旋律が豊かで、その動機はさまざまに展開され、フガートの手法も取り入れられている。第2主題は嬰へ長調、8分の12拍子へと変わり、シンコペーションによって漂うような印象を醸し出している。

第3楽章: アレグレット・グラツィオーソ(クワジ・アンダンティーノ)

ト長調。ABABAという、変則的な小ロンド形式をとり入れている。Aの部分は4分の3拍子。弦をはじいてピツィカート奏でるチェロとともに、オーボエは主旋律を牧歌的に歌い上げてゆく。この主旋律には、3拍目にアクセントと前打音がついており、同時に第1楽章の2度音程による動機もとり入れられている。軽快なBの部分は4分の2拍子に変わり、弦楽器群のスタカートに始まる。基本的にはAの部分の素材からなっている。

第4楽章: アレグロ・コン・スピリト

ニ長調。第1主題は、弦楽器によって弱奏でユニゾンによって示される。この主題にも2度音程の動機が用いられている。第2主題はイ長調、ヴァイオリンとヴィオラによって穏やかに奏でられる。ソナタ形式で書かれており、壮大なスケールとともに、伸びやかな趣のフィナーレ。

作曲=1877年

初演=1877年12月30日 ウィーン(ハンス・リヒターの指揮/ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団)

楽器編成=フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部(第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)

ブラームスと交響曲の理想

ブラームスとオーケストラ

ブラームスが交響曲を作曲する時、どのようなイメージを持っていたのであろうか？

ブラームスは、ハンブルクに生まれ育ち、最初の音楽教育もこの地で受けた。父がコントラバス奏者を務めるハンブルク・フィルハーモニー協会の演奏会で、交響曲の演奏に接していることはわかっており、早い時期から古典的な交響曲を知っていたに違いない。

1853年9月30日にシューマン家の扉を叩いて以降、ブラームスはシューマンを通して新しい創作の世界へと入ってゆく。そして交響曲というジャンルと対面する。

まず、ブラームスが交響曲の創作を構想したときに手本としたひとりが、ハイドンであった。ブラームスは、デトモルトの宮廷で数年間ピアニストや指揮者として活動を行なうなかで、2曲のセレナード、作品11と作品16を書き上げた。この《セレナード第1番》の第1楽章で、彼はハイドンの《交響曲第104番》の第4楽章の楽想を借用している。《セレナード第1番》の第1楽章では、空虚五度が鳴り響くなかで牧歌的な旋律が奏でられる…19世紀後半の創作とは思えないほどに、のどかな雰囲気セレナードだ。このセレナードが、ブラームスの交響曲創作の出発点と言ってもよいであろう。

《セレナード第1番》は、ハイドンだけではなく、スケルツォ楽章ではベートーヴェンの《交響曲第2番》のスケルツォの表現を借用している。この作品は、彼がハイドンとベートーヴェンの研究を礎として、管弦楽曲の作曲を始めたことをよく物語っている。その後、《セレナード第2番》を書き上げた。このセレナードでは、ヴァイオリンは用いられず、管楽器が主体となっている。主要な旋律も管楽器が表わすなど、ブラームスの管楽器の表現を確立するうえで、非常に重要な役割を担った。

シューマンは、ブラームスのことをベートーヴェンの再来として「音楽新報」で広く紹介した。シューマンから褒められたえられたブラームスは、どんな心境であっただろうか。もしかしたら、何としてでも交響曲の創作に取りかからなければとの思いが彼のなかにあったのではないだろうか。

1854年、ブラームスは《2台のピアノのためのソナタ》の作曲に取りかかり、この作品を交響曲に編み直そうとしている。しかし、その試みはうまくいかず、最終的に《ピアノ協奏曲第1番》として完成をみた。翌年、ハ短調の交響曲の構想をもつ。すなわち、20年ほど後に完成される《交響曲第1番》である。

交響曲と管楽器

ブラームスは《交響曲第1番》を作曲する際、管楽器の役割を改めて深く考えたに違いない。というのは、この交響曲の前に、彼は《ハイドンの主題による変奏曲》の創作に取り組んでいる。《ハイドンの主題による変奏曲》での課題のひとつは、管楽器のさまざまな表現であった。また、ブラームスはこの変奏曲の作曲にあたり、かつての2曲のセレナードを思い起こしたことであろう。ある意味では、この変奏曲は2曲のセレナードの発展形ともいえよう。その後、彼は《交響曲第1番》の創作に着手するのである。

《交響曲第1番》でとりわけ注目されるのは、第4楽章の序奏におけるホルンの長い独奏である。曲目解説でも触れたが、ブラームスは《交響曲第2番》においても第1楽章の終結部でホルンの長い独奏を用いるなど、交響曲のなかで管楽器に長い独奏を担当させている。その最も顕著なのは、ホルンの独奏である。

《交響曲第1番》の第4楽章で奏されるホルンの旋律は、ブラームスにとって特別な意味が込められている。このフレーズは、クララ・シューマンの誕生日祝いとして1868年9月にスイスから彼女へ送られたもので、そのハガキには次のように記されている。

「今日、アルプスの角笛がこのように響いていました。高い頂の上、深い谷であなたへ心よりごあいさつ申し上げます。」

遠い山の頂から響いてくるようなこの厳かな旋律は、のちに《交響曲第1番》の第4楽章序奏の有名なホルンの旋律へと転用された。このホルンの独奏は、管楽器に長い独奏を歌わせるというブラームスの基本的な発想に基づいている。この交響曲では、他にも例えば第2楽章においてオーボエやクラリネットに長い独奏

を与えており、それゆえ、指揮者のヘルマン・レヴィはこの第2楽章について「セレナードのような」と感想を述べている。

管楽器による長い独奏は、上にも述べたように《交響曲第2番》でも行われている。第1楽章の再現部の終結部で、ホルンはティンパニに導かれて長い独奏を吹く。この独奏は、《交響曲第1番》での独奏の表現を継承しているのは間違いない。このような管楽器による長い独奏は、ブラームス独特の表現である。

《交響曲第2番》では、ホルンの独奏のほかにも、第1楽章の主題が提示されてほどなく、音量を減じてやがてティンパニのトレモロが遠雷のように鳴り響き、その後にトロンボーンが厳かに響き渡る。トロンボーンのこの表現は、明朗な《交響曲第2番》のなかではややもすれば見逃されてしまいがちであるが、ブラームスにおいては特別な表現であったことは明らかである。ホルンの奏するのどかな楽想と、ヴァイオリンによる伸びやかで春を思わせる楽想の間に挿入された、ティンパニの遠雷とトロンボーンの響きはとても厳粛な印象をもたらす。

また、《交響曲第2番》においても、2つの中間楽章では管楽器が大きな役割を担う。第2楽章では、ファゴットが下からにじり寄るように表わす動機に、フルートとオーボエが応える。第3楽章では、オーボエの奏でるほんの少しおどけた表情は、この楽器の新たな表情を与えている。《交響曲第2番》ではホルンとオーボエが大きな役割を担う一方で、トランペットの表現は地味である。ちなみに、この作品でトランペットが燦々と輝く音色を存分に披露するのは、第4楽章の結尾の部分で、壮麗な響きによって音楽を祝祭的に締めくくる。

《交響曲第3番》でも第3楽章でホルンの独奏が、そして《交響曲第4番》の第4楽章でも、長いフルート独奏などさまざまな管楽器が活躍する。その《交響曲第4番》第4楽章では、バッハの《カンタータ第150番》のシャコンヌのバス定型が用いられている。《ハイドンの主題による変奏曲》の終曲でも、このようなオスティナート主題を取り入れている。

ブラームスの交響曲で、管楽器の果たした役割は大きい。そして、その表現は、時には室内乐的な内面性を映し出し、時には厳粛な響きを通して奥深い世界へと聴く者をいざなう。